

特別講演

主催 埼玉医科大学消化器・一般外科(II) ・ 後援 埼玉医科大学卒後教育委員会

平成16年7月26日 於 埼玉医科大学第四講堂

外科分野を変革した針穿刺：János Veress, Veress穿刺針と腹腔鏡手技の進歩

Prof. József Sándor, M.D., Ph.D, F.A.C.S.

(Third Surgical Department, Semmelweis University Medical School, Hungary)

腹腔鏡下胆嚢摘出術ほど世界中で急速に普及した手技はない。かつて、婦人科医が腹腔鏡手技を用いたことがあったが、この手技が一般外科領域で使われ出した1980年代後半に飛躍的な進歩を遂げた。現在では、腹部外科や胸部外科のあらゆる分野で腹腔鏡あるいは胸腔鏡を用いた手術が行われている。

腹腔内を観察・操作するために必要な空間を得るために気腹することが、腹腔鏡手術の第一歩である。しかし、気腹針を発明した人物とこの発明の経過を知る人はほとんどいない。ハンガリーの内科医のJános Veress (1903-1979)は、Kapuvar病院の感染症科の部長であった。第1次世界大戦の後、ハンガリーには多くの結核患者がいたが、抗結核剤を十分に手に入れることができなかった。そこで、患側肺に対して気胸をつくる治療が

考案された。胸壁を貫通する時に生じる肺損傷を避けるための色々な方法があったが、どれも安全とは言い切れなかった。1932年に、Veressは人工気胸術時に用いる特別なバネ付きの針を考案した。この新しい器材によって、Veressは多数の結核患者を救うことができた。さらに1938年には、Veressはこの器材を用いて腹腔穿刺を行うようになった。おそらくR. WittmoserとK. SemmがこのVeress針を腹腔鏡手術に導入したと思われる。この針が適正に使われれば、腹腔鏡手術時に生じる損傷や合併症の頻度は極めて低いものとなる。小開腹や釣り上げ式の腹腔鏡手術を行う外科医もいるが、この針の有用性は歴然としている。この器材は最新外科手技のさらなる発展に寄与するであろう。

(文責 辻 美隆)